
ポケットモンスター レグルス

Ferix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター レグルス

【Nコード】

N3460Z

【作者名】

Ferix

【あらすじ】

D・H団リーダーであるターナーの世界征服に立ち向かう、主人公のカズキとそのポケモンたちとの話である

少し執筆者の妄想も入ってます。

episode 1 旅の予兆（前書き）

Ferixです！

基本はゲームをプレイしてるのを基準にしています

初投稿なので下手ですがよろしくお願いします

episode 1 旅の予兆

ここはポケモンと人間が共存する世界

ポケモンと人が協力し合い生きている

ポケモンを使い「悪」をはたらく人間もいる

いままでにもたくさんそんなことあった

俺も2回そんなことがあった

一つはハウエンで、もう一つはトーホクで

チャンピオンにもなったが、そんな器じゃないし、いろんな地方にも行きたい

3

「次はどこいくかな」

「どこに行くの？」

その声が聞こえて目の前が何かで覆われる

「ミドリか？」

「当たり前」

こいつはハウエンで住んでた家のお隣さんだ
同じ年でちよつとうるさい奴だ

「久しぶりだな、いつ以来？」

「うーんと、こおりの島だよね最後」

「そうだったわけ？」

「うん、そんなことよりどこに行くの？」

「他の地方だよ」

「他の地方でもチャンピオン狙うの？」

「まだちゃんと決めてないけど、まあ最終的にはそうなるんじゃないかな」

「どこの地方にするの？」

「ジョウトにでも久しぶりに帰るかな」

「えっ、カズキ君ってジョウト出身なの！？」

「ああ、言ってなかったっけ。父さんはもともとウツギ博士の助手をしてたんだ。それでその後母さんと俺のふたりでミシロに引っ越したんだ。そしたら父さんはトーホクの研究所を任されてまた引っ越したんだ」

「そうだったんだね」

「ああ、まあそれ以外にもジョウトに行きたい理由はあるんだけどな」

「なにになに？」

「まえにギンノさんがジョウトのシロガネ山に強いトレーナーがいるっていったからさ」

ギンノさんはトーホクのチャンピオンであり、水の都アルトマーレジムのジムリーダーだ。昔、銀色の魔女と言われてたらしい。

「さすがチャンピオンだね、強いトレーナーがいるとすぐに食いつくねえ」

「別にいいだろ」

「悪いなんかいつてないよ、それより私も連れてってよ」

「え、なんで？」

「別にいいでしょ」

「まあ、別にいいけど…」

「ありがとう！じゃあ荷物取りにいかないかね」

「そうだ、トーホクに家あんの？」

「借りれる場所ないからカズキくんのお母さんに頼んで荷物置かせてもらってるんだ」

「今初めてしつたよ…」

「とりあえず荷物取りにいかないとね」
「ああ、そうだな」

くハクジタウンく

「ただいま、母さん」
「お帰りなさい、カズキ」
「おじゃましてーす」
「あら、いらっしやいミドリちゃん。カズキが女の子連れてくるなんて」

「荷物取りにきたただだよ、母さん」
「あら、またどっかにいくの」

「うん、ジョウトにいこうと思ってるんだ」
「懐かしいわね、ジョウト。母さんも行こうかしら？」
「くるの!？」

「冗談よ、母さんは家守らないといけないしね」
「そっか、じゃあちよつと荷物つめてくるよ」
階段を登る二人

このときまだ誰もなにが起こるかは知る由も無かった

episode 1 旅の予兆（後書き）

3日に一度かけるようにいたしますのでお願いします

e p i s o d e 2 船内での出会い（前書き）

なんか…ビミョーです…

episode 2 船内での出会い

「準備できたか？」

「できたよ」

「よし、じゃあ行くか」

階段を降り、母に挨拶をつけると二人は外にでた

「カズキ君、どうやって行くつもり？」

「アーシア島からジヨウトのタンバに向かって船がでてるはずだからそれに乗って行くよ」

「じゃあアーシア島に行こう！」

ポケットからボールを取り出し空に向かって投げると、なかからトロピウスとドラドーンがでてくる

「トロピウス！【そらをとぶ】だ！」

「ドラドーンも【そらをとぶ】よ！」

二人は空に上がった

ちなみにふたりの手持ちは

カズキ

トロピウス

ファマイン

フローリア

バフォット

リーフィス

ガブリアス

ミドリ

ドラドーン

エレキブル

ユニサス

タテボーシ

ブーバーン

プラネム

「このままアーシア島までいくぞ」

同時刻 レンジャーベース

「テテレテッテレー、モスギスさん登場！」

「やあモスギスどうしたんだい？」

「ジャッキーに報告があるので、ななな、なんと！ターナーが動きだしました！」

「それは本当かモスギス！？」

「はい、これはポウがつかんだ情報なのでしんじるべきでふ！」

「狙いはどこかわかるか？」

「あはい、ターナーはジョウトを狙ってるようです」

「わかった、モスギスは先にジョウトにいつていてくれ、俺はナツユキと後から行く」

「了解！」

（戦いがまた始まるのか…）

2日前 ポケモン城

「もう一度このポケモンを使うとはな、いつかの復讐を、恐怖を見せてやる。お前の大切なものがなくなるのはお前のせいだと感じるがいい、ククク…」

冷たいその笑い声は静かに闇に消えていった

現在 アーシア島

「ちょっとチケット買ってくるから待っててくれ」

「私もついていこうか？」

「別にいいよ、お前の分も買ってくるから」

「そう？ありがとう」

そういうとカズキはチケット売り場に向かって歩きだした

（暇だなー、カズキ君ってポケモンのことばかりだなー、ちょっとは見てくれてもいいのに）

チケット売り場から戻ってくるカズキ

「ほら、これ船のチケット」

「ありがとう、いくらだった？」

「あー、別にいらねーよ」

「えっ、いいの？」

「別にいいよ、ほら早く行くぞ」

「う、うん。ありがとう」

船に向かって歩き出すふたり

船に乗り込み部屋を、探す

「にしてもでかい船だね」

「まあ豪華客船だしな」

「そんなお金どこにあったの…？」

「なんか、トレーナーがたくさん勝負しかけてくるからいつの間にな」

「へー、そうなんだ」

そして自分の部屋番号をみつけるミドリ

「あつ、私ここだ」

「俺は隣だ」

「偶然だね!」

「そうだな、とりあえず荷物置いてくるからまた後でな」

「うん!」

部屋に入るふたり

「へー、結構大っきいなこの部屋」

この部屋は1人部屋にしてはおおきい

「でてこい、みんな」

ギャーオ

「疲れをとつといってくれよ」

そういうとカズキは部屋をでて隣の部屋をノックする

「おい、まだか?」

「いま行くー」

そういうと部屋からでてくるミドリ

ミドリは後ろで髪をくくっていて可愛らしい、一般にオシャレな服をきていた

(うつ、か、可愛い)

「?、どうしたの?」

首をかしげるミドリ

「な、なんでもねーよ／＼／＼　　そ、それより早くいこーぜ、お腹すいてしょーがねーよ」

「そうだね」

そうして船内を歩くふたり

(な、なんか緊張してるし!頑張れ俺!)

「いつみても広いなー」

「そ、そうだな」

「どうしたの?」

「な、なんでもない」

「ふうん」

いろいろ見て回っているとうしろから声が聞こえてくる

「あれ？カズキ？」

ふりかえると見たことがある人がいた

「あなたは、ユウキさん！」

episode 2 船内での出会い（後書き）

コメント待ってまーす

episodes バトル大会（前書き）

やっばで///ショーです...

とりあえず三話目ですー！

episode 3 バトル大会

「あなたは、ユウキさん！」

「やっぱりカズキか！えっと…こちらの女の子は？」

「あつ、はじめまして、ミドリです」

（かつこいい人だなあ）

「よろしく、俺はユウキ！ んん？ミドリって確かハルカのいとこにもいたような…」

「そうなんですよ、ハルカお姉ちゃんといとこです。ユウキさんの話はよくハルカお姉ちゃんからきいてます。ホウエンのチャンピオンになったってききました」

「あの時はおれもポケモン図鑑を集めてたしさ。それよりふたりもジョウトに何しにいくんだ？」

「俺の故郷なんですね」

「へえそうだったんだな」

カズキはユウキになぜホウエン、トーホクに来たのかをはなす

「そうだったんだな、やっぱりジョウトでもチャンピオン狙うのか？」

「もちろんですよ！それよりユウキさんはジョウトに何しにいくんですか？」

「まあ、ちよつとな…」

首をかしげるカズキ

「そうだ！いまからご飯食べるんですけど、ユウキさんもどうですか？」

「俺はさつき食べたからいいよ、それより8時からポケモンバトルの大会があるんだけどでないか？」

「でますでます！」

「私はやめときます、自信ないんで、」

「ならカズキ今からエントリーしに行くつもりだからお前の名前もかいておくよ」

「お願いします」

ユウキは去っていく

「ねえ、カズキさんとユウキさんはどっちがつよいの？」

「一勝一敗だよ」

「互角なんだ、私なんか一回もカズキくんを買ったことないのに、ユウキさんはすごいな」。出なくて正解だったね！

「まあ、だてに伝説の名をしょってないよな」

「伝説の名？」

「えーと、一年前にホウエンで異常気象あっただろ？」

「カズキくんが解決したやつでしょ？」

「そうだ、それと同じような事件がその時から3年前、つまり今から4年前にもあったんだ。それを解決したのがユウキさんだったんだ」

「だから伝説なんだね」

「そーゆーことだ」

「今回のバトルでどっちが伝説の名にふさわしいか決まるかもね！」
「かもな」

食事を済ませたふたりは一旦部屋に戻りポケモンを連れてきた

そして、ミドリは観客席にカズキは大会出場者の控え室にむかった

そこにはトーナメント表があった

そこには32人の名前が書かれている

「俺たちは決勝で戦うみたいだな」

うしろからユウキが話しかけられる

「そうみたいです、ユウキさん。負ける気はないですから」

「それはこっちもだよ、カズキ。全力を出し切ろう」

従業員出口からスタッフが出てくる

「それでは今から大会のルール説明をいたします。バトル形式はシングルバトル。ポケモンは3匹です。それではいまからポケモンのエントリーをいたしますので呼ばれましたらこちらまでお願いいたします」

（3対3か：どのポケモンでいくかな）

「ヒイラギ カズキさん、こちらまでどうぞ」

（あいつらにしよう）

エントリーパネルに打ち込む

「それでは、いまから一回戦をはじめます！ユウキさん、こがねさんお願いします」

スタジアムに出て行くふたり

「ユウキさん、がんばって下さい」

ユウキは親指をたててみせる

そして、大会の幕があけた

episode 3 バトル大会（後書き）

次はとうとうバトルです。

しばらく続きます

episode 4 一回戦（前書き）

初のバトルです！

結構むずかった 笑

episode 4 一回戦

「それでは、今から第一回戦を始めます。両者前へ、礼！」
頭を下げるふたり

「では、バトルスタート！」

「いけっ、フィニクス！」

「いつてこい、ライチュウ！」

ユウキはフィニクス こがねはライチュウをだした
相性はすこしユウキが有利だ

「フィニクス上空飛行だ！」

「ライチュウ「十万ボルト」だ！」

「かわせ！フィニクス！」

電気をかわすフィニクス

「フィニクス、「火炎放射」！」

「ライチュウ！「高速移動」で相手の下に逃げる！」

ライチュウは素早くうごきフィニクスの下まで逃げる

「ライチュウ！「ボルテッカー」！」

「フィニクスかわせ！」

しかし、ライチュウの攻撃をくらい地面に倒れるフィニクス

「がんばれフィニクス！」

「ぐ、ぐー」

なんとか持ちこたえたフィニクス

だが、体力はかなり減っている

「ライチュウとどめの「十万ボルト」！」

「チューー！」

十万ボルトがフィニクスに直撃する
「くー」

弱々しいこえをだすフィニクス
そして、

「フィニクス戦闘不能ライチュウの勝ち！」

「よくやったぞ、フィニクス」

ボールにフィニクスを、もどす

「頼んだぞ、エルレイド！」

「ライチュウ「十万ボルト」！」

「エルレイド！「まもる」！」

十万ボルトは跳ね返された

「エルレイド、「サイコカッター」！」

サイコカッターをモロにくらったライチュウは倒れた

「ライチュウ戦闘不能！エルレイドの勝ち！」

「もどれ！ライチュウ、いけっ、ゴローニャ！」

「エルレイド、「リーフブレード」だ！」

「ゴローニャ「じしん」で相手を足止めするんだ！」

身動きの取れないエルレイド

「ゴローニャ「あなをほる」」

「エルレイド、感覚で相手の場所を感知しろ！」

エルレイドは全身の神経に集中してゴローニャの場所をさがしている

「今だゴローニャ！」

「エルレイド、うしろだ！「リーフブレード」！」

リーフブレードをくらったゴローニャは倒れた

「ゴローニャ戦闘不能！エルレイドの勝ち」

「ゴローニャもどれっ、いけっ、ルカリオ！」

「エルレイド、「インファイト」」

「ルカリオ！「はどうだん」だ」

「エルレイド、つつこめ！」

エルレイドの目の前に、はどうだんがきた瞬間

「エルレイド「高速移動」」

エルレイドはルカリオのうしろにまわりこんだ

「今だエルレイド！」「インファイト」だ！！」

ルカリオに直撃する

「ルカリオ戦闘不能！エルレイドの勝ち！よって、勝者ユウキ！」

ワァー

観客席からどつと歓声がわく

「強いですね、ユウキさん」

「いえ、こがねさんもですよ」

「いい戦いでした。また機会があればバトルしましょうね」

「もちろんです」

握手を交わすふたり

そのころミドリは

「やっとポップコーンGET！」

「さすがですね、ユウキさん」

「ありがとう、カズキ。次はお前だ、がんばれよ！」

「ありがとうございます」

そしてカズキのときがやってきた

「じゃあいつてきます、ユウキさん」

「おお、がんばれよ」

「絶対優勝する！」

episode 4 一回戦（後書き）

とくに書くことはありません！

それでは次回をお楽しみに、

episodes 九回戦（前書き）

章に分ける事にしました！

あと第九回戦ですが、あいだの第二―七回戦はストーリーに関係ないので省略します、

では、お楽しみください

episode 5 九回戦

「それでは、第九回戦を始めます！両者前へ、礼！バトルスタート！」

「いけっ、リーフィス！」

「行くしかないんじゃないの？ドラドーン！」

第九回戦が始まったそのとき

「間に合った、トイレ混んでるんだもん。あ、ちょうどカズキ君だよかった！頑張れ、カズキ君」

カズキ視点

「さっさと終わらせよーぜ、まあすぐ終わるかw」
挑発をする相手

「そうだな、そっちがすぐ終わるな」

「はあ、舐めてんのか？お前なんかなあ5分でかたずけてやんよお」
「ならさっさと始めようぜ、」

「こいよお」

「いくぞ！リーフィス！「冷凍ビーム」！」

「ドラドーン、「ハイドロポンプ」」

ふたつの技がぶつかり合う

「ドラドーン、「バグノイズ」かましちゃってー！」

「リーフィス、「まもる」」

間一髪のところでももるリーフィス

（確かにつよいな…けど隙が多いからいける！）

「リーフィス、「冷凍ビーム」！」

「何度やっても同じ、「ハイドロポンプ」」

「今だ、「はっぱカッター」！」

はっぱカッターはハイドロポンプにあたり消えてしまいが、水に裂け目ができ、その間に冷凍ビームがはいる

そして、ドラドーンに直撃した

「ドラドーン戦闘不能！リーフィスの勝ち！」

「やるじゃねーか、お前」

「俺を舐めんなよ」

「次はこいつだ、いつてこい！ドルマイン！」

（ドルマインか…相性は普通か）

「ドルマイン、「シグナルビーム」やっちゃって」

「リーフィス「冷凍ビーム」！」

相打ちとなり技が掻き消される

「ドルマイン、「十万ボルト」うっちゃって」

「リーフィス「まもる」！」

そして、まもりの壁が消えたとき

「このときを待ってたぜ！ドルマイン、「だいはくはつ」！」

（しまった！！）

「リーフィス、ドルマイン共に戦闘不能！」

「だいはくはつでくるとは思わなかっただろ？」

「ああ、まえの十万ボルトはおとりでまもるを釣ったって訳か」

「そのとおり、それでまもるのあとのインターバルを狙ってドカー

ン！！って訳だよ」

「おれは一枚噛まされたってことか、だがなあ、おれにも策はある、いけっ、ファマイン！」

「レッツゴー！ゲンガー！」

「ファマイン！「かえんほうしゃ」！」

「ゲンガー、JUMPしてよけちゃって」

「ファマイン！「シャドーボール」」

「ゲンガー「シャドーボール」」

「ファマイン！「十万ボルト」」

「ゲンガー！」「サイコネシス」

ほぼ互角のたたかい

「ファマイン、「シャドーボール」」

「なんどやってもおなじだ！」「シャドーボール」

「ファマイン！」「ジオインパクト」！」

シャドーボールをはなつたインターバルでジオインパクトをモロに受けるゲンガー

「ゲンガー戦闘不能！ファマインの勝ち！よって、勝者！カズキ！」

「強かったカズキ」

「いえ、お前もだよ！」

こうして第九回戦はおわった

episodes 九回戦（後書き）

感想、コメントなど待ってまーす

e p i s o d e 6 決勝戦 - 1 (前書き)

やっぱり難しいなあ

変なところあるかもですけど楽しんでください！

episode 6 決勝戦 - 1

「それでは、いまから決勝戦を始めます！両者、礼！バトルスタート！」

決勝に進んだ二人の試合は審判の合図で試合がはじまる

「どっちが勝つかなあ、どっちも勝つなんて無理だし、迷うよー」
観客席から見ているミドリ

そして、ユウキはフィニクスを、カズキはリーフィスを繰り出した
「二人ともいままでの試合で2体しかポケモンだしてないからなあ。
三体目で勝負がきまるわね」

ふたりのバトル展開を予想するミドリ

カズキ、ユウキ視点

「リーフィス、「冷凍ビーム」！」

「かわして、「火炎放射」だ！」

「リーフィス「ハイドロポンプ」！」

「フィニクス、「エアスラッシュ」？」

「リーフィス！「まもる」だ！」

互角な戦いを見せる二人

（さすが、ユウキさんだ。隙がまったくない…）

（まもるは厄介だな、どう攻めるか…）

「フィニクス、「火炎放射」！」

「リーフィス「冷凍ビーム」でかき消すんだ！」

ぶつかり合う二つの技

砂ぼこりが舞う

「今だ、フィニクス！」「オーバーヒート」！」

「リーフィスかわせ！」

しかし、不意をうたれたリーフィスは完全によけることはできなかった

「リーフィス、がんばれ！」「はっぱカッター」だ！」

「フィニクス、「火炎放射」で焼き尽くせ」

はっぱカッターは相手の気をひくためのものだったが、炎で焼かれてしまう

（くそっ、どうしたらいいんだ…）

「今度はこっちから行くぞカズキ！」「エアスラッシュ」

「「まもる」だリーフィス」

まもるでエアスラッシュを防ぐリーフィス

「今だ、「流星群」！」

まもるのインターバルを狙ったその攻撃は見事にリーフィスに直撃した

そしてリーフィスの目はとうとう回ってしまった

「リーフィス戦闘不能！フィニクスの勝ち」

「よしっ」

「戻れっ、リーフィス。よくやってくれた」

ボールをポケットに入れ、つぎのボールを取り出す

「いけっ、ファマイン！こっちから行きますよ、ユウキさん。「火炎放射」！」

「とっちも「火炎放射」だ」

ぶつかり合う技、しかし、フィニクスの方が押されている

（オーバーヒートと流星群の後遺症か、そのせいで火炎放射の力が弱まってる）

「ファマイン、「シャドーボール」」

「フィニクス「火炎放射」で防御」

しかし、後遺症で弱まった力で防げずにシャドーボールはフィニクスへ直撃した

「まだだ、フィニクス！上に向かって「エアスラッシュ」だ」

上にエアスラッシュをはなったフィニクス、その直後上から乱雑におちてくる空気の摩擦

「ファマイン、「十万ボルト」で防げ！そのまま、「シャドーボール」

落ちてくる空気の摩擦を防いでそっちに気がいつてる隙にシャドーボールをあてる

体力もかなり消耗していまフィニクスはシャドーボールが直撃して倒れる

「フィニクス戦闘不能！ファマインの勝ち！」

お互いの手持ちは2体ずつになって試合は中盤に入った

episode 6 決勝戦 - 1 (後書き)

次回に続きます、

コメント、質問など待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3460z/>

ポケットモンスター レグルス

2011年12月26日21時56分発行